

子宮外妊娠による急死例について

東京都監察医務院 (院長 吉村三郎博士)

平 瀬 文 子
ヒラ セ フミ コ

東京女子医科大学法医学教室 (主任 吉成京子教授)

堀 昭・小 栗 備 恵・沢 口 彰 子
ホリ アキラ オ グリ トモエ サワ グチ アキ コ

(受付 昭和38年7月8日)

1. 緒 言

昭和23年3月から昭和35年7月に至る12年間に、東京都監察医務院で剖検した子宮外妊娠(以下外妊と略す)による急死例49例について報告する。

2. 研究資料および研究方法

東京都監察医務院における12年間に、外妊として検案および剖検を行なった49例について、年齢別、死亡迄の時間、妊娠月数、外妊部位、腹腔内出血量、胎児の身長、誤診例、職業別、倒れた場処等によつて調査した。

3. 研究成績

(1) 年齢別 (第1表)

17~20才までが3例, 21~25才までが12例, 26~30才までが14例, 31~35才までが17例, 36~40才までが1例, 41才が2例である。

第1表 年齢別

年齢(才)	例数
17~20	3
21~25	12
26~30	14
31~35	17
36~40	1
41	2

(2) 死亡までの経過時間 (第2表)

1時間から5時間までのもの16例, 5時間から10時間までのもの12例, 10時間から15時間以内のもの14例, 15時間から20時間以内のもの6例, 4日のもの1例であった。

第2表 死亡までの経過時間

死亡までの時間	例数
1.00~ 5.00時間	16
5.01~ 10.00 " "	12
10.01~ 15.00 " "	14
15.01~ 20.00 " "	6
4日	1

(3) 妊娠月数 (第3表)

約1カ月のもの15例, 約1.5カ月のもの11例, 約2.0カ月のもの14例, 約2.5カ月のもの3例, 約3.0カ月のもの4例, 約4.0カ月のもの2例である。

第3表 妊娠月数

妊娠月数	例数
1.0	15
1.5	11
2.0	14
2.5	3
3.0	4
3.5	0
4.0	2

(4) 外妊破裂部位 (第4表)

卵管膨大部24例, 卵管峡部22例, 卵管総部1例, 卵管間質部2例。

(5) 腹腔内出血量

1000~1500cc 9例, 1501~2000cc 27例, 2001~2500cc 10例, 2501~3000cc 3例。付図写真1. 腹腔内出血2000cc。

Fumiko HIRASE (Tokyo Medical Examiner Office), Akira HORI, Tomoe OGURI & Akiko SAWAGUCHI (Department of Legal Medicine, Tokyo Women's Medical College): On the autopsy of sudden death due to graviditas extra-uterina.

平瀬・堀・小栗・沢口論文付図

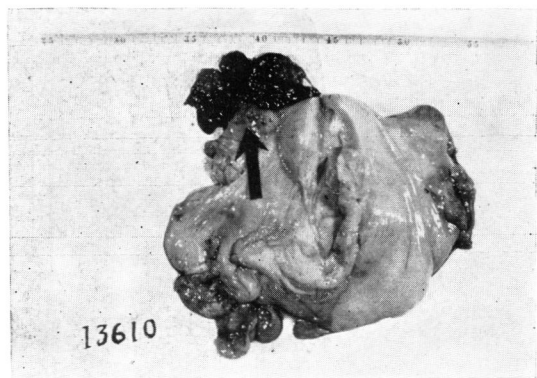


写真1. 27才 卵管破裂 (約1ヵ月)

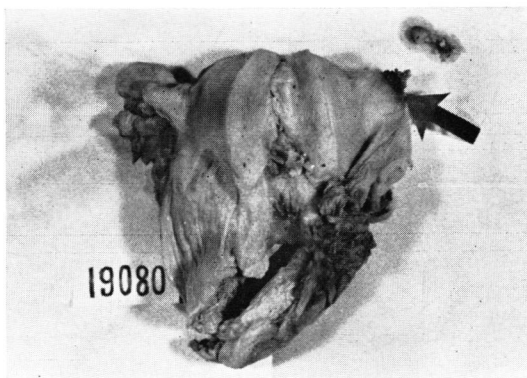


写真2. 28才 卵管破裂 (約2ヵ月)

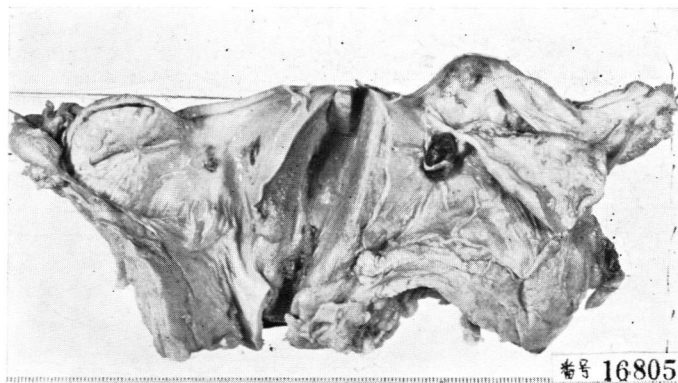


写真3. 22才 卵管破裂 (約2ヵ月)



写真4. 24才 卵管破裂 (2ヵ月)

第4表 子宮外妊娠部位

部 位	例 数
卵管膨大部	24
卵管峽部	22
卵管綫部	1
卵管間脬部	2

(左側23例, 右側2例)

第5表 腹腔内出血

出血量 (cc)	例 数
1000~1500	9
1501~2000	27
2001~2500	10
2501~3000	3

写真2.2700cc, 写真3.2500cc, 写真4.1600ccである。

(6) 胎児の身長 (第6表)

1.0~5.0cmのもの15例, 5.1~10.1cmのもの, 10.1~15.0cmのもの各々1例, 15.1~16.2cmのもの2例。すなわち19例の胎児が腹腔内より発見された。

第6表 胎児の身長

胎児の身長 (cm)	例 数
1.0—5.0	15
5.1—10.0	1
10.1—15.0	1
15.1—16.2	2
計	19

(7) 誤診例

正常妊娠と誤つて搔爬したもの6例, 食中毒4例, 胃痙攣3例, 胃潰瘍, ぶどう状鬼胎, 腸カタル, 胆石症, 付属器炎各々1例である。なお医師の診断を全然うけないものが19例あつた。

(8) 職業別

ホステス5例, 会社員4例, 妾および料理屋の女中おのおの3例, 街娼が2例, その他の職業はダンサー, 美容師おのおの1例で, 主婦は一番多く22例である。

(9) 倒れた場処

病院7例, 路上2例, 旅館2例, キャバレー, 駅, おのおの1例, 其他は家庭内である。

第7表 誤診例

病 名	例 数
子宮内妊娠 (搔爬)	6
食 中 毒	4
胃 け い れ ん	3
胃 潰 瘍	1
ぶ ど う 状 鬼 胎	1
腸 カ タ ル	1
胆 石 症	1
付 属 器 炎	1

(医師の診療を受けないもの19例)

4. 総括ならびに考按

約12年間における49例の外妊による急死例について述べる。年令別では31~35才が17例で1番多く, 最年少者は17才で最高年者は41才で, 今瀬¹⁾らの報告とほぼ同様である。著者らの例では, 死亡迄の時間は1~5時間のもの16例で1番多く, 次いで10~15時間のもの14例, 次いで5~10時間のもの12例, 次いで15~20時間のもの6例, 4日のもの1例である。これらの例からみると, 外妊による死亡例は大体1日内外で死亡しているわけである。臨床例においては今瀬らによると, 24時間以内に手術を受けるものが16.8%と非常に低率である。Crawford²⁾は腹腔内出血500cc以下47%, 500~1000cc27%, 1000cc以上26%と言っている。今瀬らは500cc以下47例(55.2%), 500~1000cc24例(28.2%), 1000cc以上14例(16.4%)。最大出血量1800ccで, 術後11日目に死亡したと述べている。著者らの例では, 腹腔内出血量1501~2000ccが27例で1番多く, 次いで2001~2500cc10例, 次いで1000~1500cc9例, 次いで2501~3000cc3例である。すなわち最大出血量3000cc, 最少出血量1000ccである。外妊破裂部位は卵管膨大部が24例, 次いで卵管峽部22例である。

誤診例では中島ら³⁾は子宮内妊娠と誤つて診断した37例中33例に子宮内容除去術を施行している, その他卵管嚢腫, 付属器炎, 腹膜炎, 子宮筋腫等である。著者らの例では, 子宮内妊娠と誤つて診断した6例について子宮内容除去術を施行している。其他食中毒4例, 胃痙攣3例, 胃潰瘍, ぶどう状鬼胎, 腸カタル, 胆石症, 付属器炎等各

1例である。これら以外の19例は医師の診断を受けないで死の転帰をとっている。竹村ら⁴⁾は誤診による子宮内容除去術を施行したものは外妊96例中23例で、掻爬後も誤診に気付かなかつたもの17例であると述べている。

5. 結 語

1. 死因は全例外妊、特に卵管妊娠の破裂（膨大部、峽部、卵絨部、間質部）による腹腔内出血である。

最大出血量は3000cc、最小出血量は1000ccである。

2. 年令別では31～35才のものが多い。
3. 死亡迄の時間は1～5時間のものが多い。

4. 妊娠月数は1カ月内外のものが多く、4カ月のものも少数認めた。

稿を終るにのぞみ御校閲をいただいた吉成京子教授に深謝する。

(本論文は第45次日本法医学会において講演したものである。)

主要文献

- 1) 今瀬ヒサ・棚山勝利：産婦人科の世界 7(11) 45 (昭30)
- 2) Crawford, E., Hutchinson, H.: Am. J. Obst & Gynec. 67 3 (1954)
- 3) 中島 精・関口允夫・沢田喜彰：産婦人科の実際 4(8) 473 (昭30)
- 4) 竹村幸子・川浪顕子：産婦人科の世界 11 (6) 983 (昭34)